

『都市と農村』(朝日常識講座 第六巻)

柳田國男 著

朝日新聞社 [刊]

1929年 284頁 図書番号 OA-0202

本書の著者は、『遠野物語』などで知られる民俗学者の柳田國男である。柳田は1920(大正9)年から1930(昭和5)年まで朝日新聞社の客員を務め、在職中に本書を執筆した。

自序において柳田は「此機會を以て村の人と、町に出て居る人とが協力して、共にこの一つの題目を討究するの氣風を、喚起したいと願ふ」と書いている。「農民の加擔が若し無かつたならば、多くの都市はとても是だけの成長もせず、又存續して今日に至ることを得なかつた」「町作りは乃ち昔から、農村の事業の一つであった」と述べている通り、農村こそが都市の母胎であり、都市の繁栄を支えるのは農村である、というのが柳田の考えであった。ゆえに、都市と農村の問題を考える場合でも両者を対立する関係とはせず、共生するための方法を模索することになる。では、都市と農村の抱える問題とは、具体的にどのようなものか?

農村の抱える問題として、土地を持たない小作人とわずかな土地しか持たない小自作農の窮乏、外部資本に農業以外の家内生産(副業)を取って代わられたことによる不自然な「純農化」とそれに伴う農村の衰退、を挙げている。そして、国が行う補助金の支出や輸入農産物への関税といった手厚い農業保護政策では「救はるべきものが救はれては居ない」のであり、農村の衰退を防ぐ役には立っていないと批判する。

一方都市の側にも、失業者の増大、中間業者としての小商人の過剰な増加、都市への商品の集中と不必要的消費の拡大などの問題がある。農村から都市への人口流入は都市の活力源となる反面、失業などの問題を生み出し、都市への芸術文化や商業の集中は、農村との格差を大きくし、農村の衰微感の原因となっていた。

こうした問題の解決策を、本書の中で柳田はいくつか提示している。そのひとつが、地方分権である。現在一部の大都市に集中している権能を各地方都市に移譲することで「地方分権は必然に中以下の都市を有力ならしめるであらう。彼等に各自の地方の生産利害を或程度まで代表させることになると、其相互の間の聯絡と融通が、自然に親密になる望みもある。…(中略)…今後確實なる對等交通が、全国都市間に成立つ様になれば、其利益は更に各都市周囲の農村部に及んで、それぞれ獨立して最も適切なる生産計畫を立て、之に基いて追々には、農地の収容し得ざりし勞力を有意義なる餘裕として都市の為に働かせ、徒らに無節制の消費を好景氣と名けて、明けても暮れてもそれを待つ様な、不調和なる階級ばかりを増加させずに済まうと思ふ」と述べている。

また、小作人や小農家の窮乏に対しては、土地利用方法を改革して自作農を創設すべしとする。そのためには、地主も一自作農家にもどすべきであり「地主が若し到底再び自作に復することの出來ぬ者であるとすれば、彼等が村に住して土地の収益を分取りするだけの生活は、全然無くするか若くは出来る限り少なくした方が宜しい」としている。

柳田の主張が当時の政策に反映されることはなかったが、地方分権や農業保護政策といったその見識は、現代にも通じるものである。

(井上学・市政専門図書館司書)